古代日本の女性の活躍

佃　収

はじめに

北九州市立男女共同参画センター主催の「ムーブフェスタ　２０２３」があり、「２０２３年７月22日」に講演をした。

これはその時の講演資料である。

第１章　「日本人」の起源

１　人類の移動（Ｙ染色体遺伝子）

(1)　細胞

■ヒトの細胞　…　70兆個

■細胞の中に「核（１個）」、「ミトコンドリア（数百個～）」

○核　…　染色体（23対46本）

■染色体　…　長い順に「1～22」まで番号が付いている。

a．「1～22」の対は同じものがコピーされている。

b．23番目は「性染色体」

「X」＝女性　　「X」＝男性

「X」　　「Y」

(2) **DNA**

○染色体は「DNA」と「タンパク質」が集まって出来た固まり。

a．DNA　…　塩基（A、G、C、T）・糖・リン酸が結合したもの。

（A＝アデニン、G＝グアニン、C＝シトシン、T＝チミン）

■「核」のDNA　…　約30億個

■「ミトコンドリア」のDNA　…　約1万6500個

(3) **DNAと遺伝子**

a．DNAの中で遺伝するもの　＝　「遺伝子」

b．人体では、「遺伝子」はDNAの2％

(4) **ゲノム**

「ゲノム」とは（ヒトの場合）「22本の常染色体（対の片方）」と「XとYの2本の性染色体」の計24の染色体に入っているすべてのDNAを「ゲノム」という。（ヒトのゲノム）

（注）染色体の数はそれぞれの動物、植物により異なる。

(5) **ミトコンドリアの遺伝子と核の遺伝子**

■ミトコンドリアの遺伝子　…　女系遺伝子（母から子へ）

■Y染色体遺伝子　…　男系遺伝子（父から子へ）

○ミトコンドリア遺伝子のルーツをたどると最古の母にたどり着く。

「ミトコンドリア・イブ」と呼ばれている。（アフリカ）

○Y染色体遺伝子のルーツをたどると最古の父にたどり着く。

「Y染色体アダム」と呼ばれている。（アフリカ）

ヒトの移動は「男性中心」であり、移動した先で女性と婚姻するのが普通であろう。

□「ヒトの移動」を究明するには「Y染色体遺伝子」の解明が重要である。

2　ホモ・サピエンスの誕生

(1)　人類の系統図

○「人類の系統図」

図1　人類の系統図

○「250万年前」頃に「ホモ属（ヒト属）」が誕生。

○ホモ・サピエンスの誕生は「30万年前～20万年前」頃といわれている。

（「ホモ・サピエンス」とはラテン語で「知恵ある人」という意味）

□「5万年前」頃は、「ホモ・ネアンデルターレンシス」「ホモ・サピエンス」「ホモ・エレクトス」は共存している。

■「北京原人」「ジャワ原人」は「ホモ・エレクトス」。

3　出アフリカ（Y染色体遺伝子による）

(1)　「Y染色体アダム」（8万年前ころまで）

○「Y染色体遺伝子の系統略図」

図2　Y染色体遺伝子の系統略図

（京都大学文学部研究科編『日本語の起源と古代日本語』（臨川書店、2015年）（B本とする）

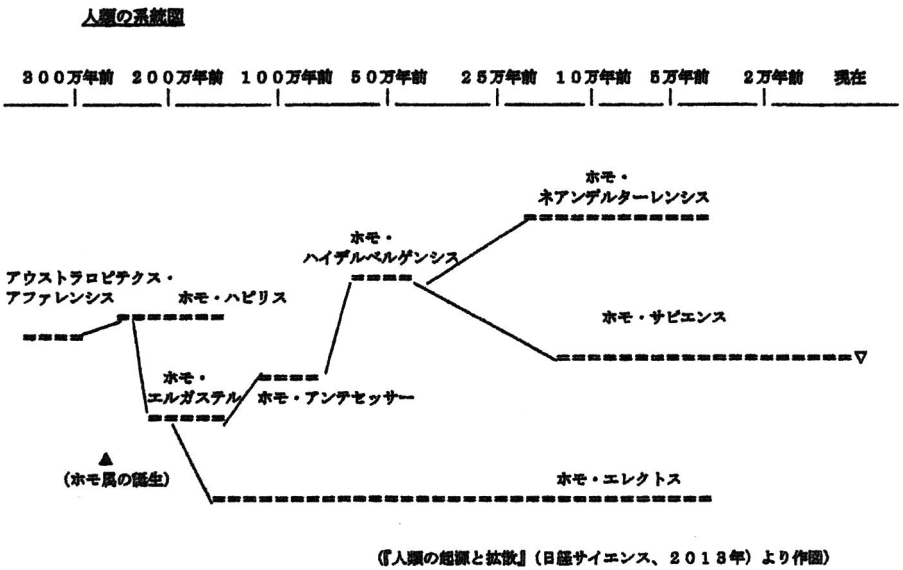


図1　人類の系統図

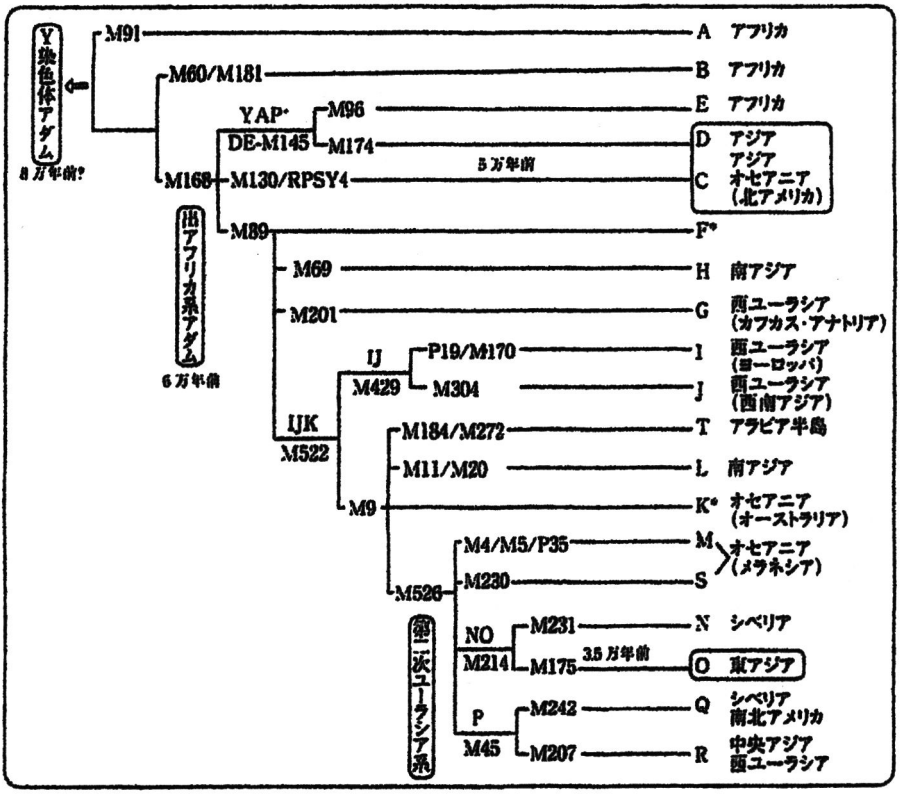


図２　Ｙ染色体遺伝子の系統略図

(2) **出アフリカ系アダム（6万年前）**

・「6万年前」ころ、ホモ・サピエンスはアフリカを出て、「中東」へ行く。

・「中東」から全世界に拡散する。「M168」（図2）

○中東でネアンデルタール人と混血

(3) **北方モンゴロイドと南方モンゴロイド**

・「D、C」系統は東へ向かう。ヒマラヤ山脈の北を通って「シベリア」方面へ行くのが「北方モンゴロイド」。

・ヒマラヤ山脈の南を通って、インド、マラッカ海峡、東南アジアへ行くのが「南方モンゴロイド」

・どちらも「約4万年前」頃にはたどり着いているという。

□「縄文人」は南方モンゴロイド。

(4) **寒冷地適応形態（北方モンゴロイド）**

○「寒冷地適応形態」とは

・背が低く胴長短足

・丸顔、頬骨が高い

・鼻の付け根が低い

・鼻が小さく顔が平たい（のっぺりした顔）

・一重瞼

・乾型耳垢

□東北アジア人、東アジア人は「寒冷地適応形態」であるから「北方モンゴロイド」である。

4 北方モンゴロイドの移動（約1万8000年前）

(1) **氷河期の最盛期**

○最盛期　　…　約1万8000年前ころ

○最盛期では海水面の低下は北半球でとくにいちじるしく「120m」も下がった。日本列島は大陸と陸続きになり、ベーリング海峡も陸続きになる。

(2) **日本海域（日本列島、朝鮮半島、満州）集団の移動**

「O2b」は「太平洋沿岸北方群（環日本海諸語）」の系統である（図3）。

■「1万8000年前」の最終氷期の最盛期にシベリアを南下。「C3」系統。

■「O2b」の誕生。「約1万5000年前」頃、沿海州付近。（推定）

■「O2b」系統の南下　「約1万5000年前～1万年前ころ」（推定）

図3　Y染色体D、C、O系統の分岐略図

表1　環日本海域の系統

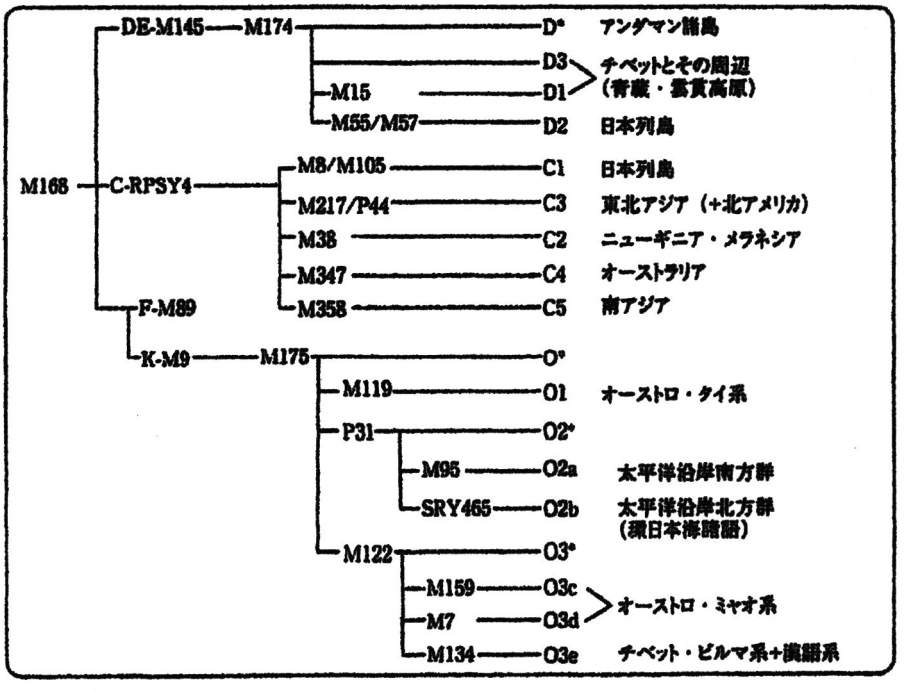


図３　Ｙ染色体Ｄ、Ｃ、Ｏ系統の分岐略図

表１　環日本海域の系統

集団名	数	C1	C3	D*	D2	N	O1	O2a	O2b	O3e	O3*
日本１	165	2.3	3.0	-	38.8	-	3.4	0.8	33.5	7.6	8.4
日本２	259	5.4	3.1	2.3	32.5	1.2	-	1.9	29.7	10.4	9.7
朝鮮１	317	0.3	8.8	0.3	3.7	3.5	4.1	1.1	29.2	27.3	17.2
朝鮮２	506	0.2	12.3	-	1.6	4.6	2.2	1.0	31.4	44.3	
満州１	48	-	20.8	2.1	-	2.1	-	2.1	27.0	41.7	
満州２	101	-	16.8	-	-	-	3.0	-	33.7	42.6	

５　満州人・朝鮮人・日本人の祖先

(1)　満州人・朝鮮人・日本人は同族

「表１」の「Ｏ２ｂ」は「日本、朝鮮、満州」でほぼ同じ高い値である。

□「日本人、朝鮮人、満州人」は同族である。

(2)　満州人・朝鮮人の誕生

「９０００年前」頃、「満州人」が分かれ、「６０００年前」頃に「朝鮮人」が分かれる。

(3)　日本人の誕生

「６０００年前」頃に「朝鮮」と分かれて、中国東北地方（医巫閭山）付近に住む。（辰の誕生）

図４　医巫閭山

□その中の一部は渤海沿岸をまわり、中国の呉地方へ向かう。「日本人（倭人）」の誕生である。

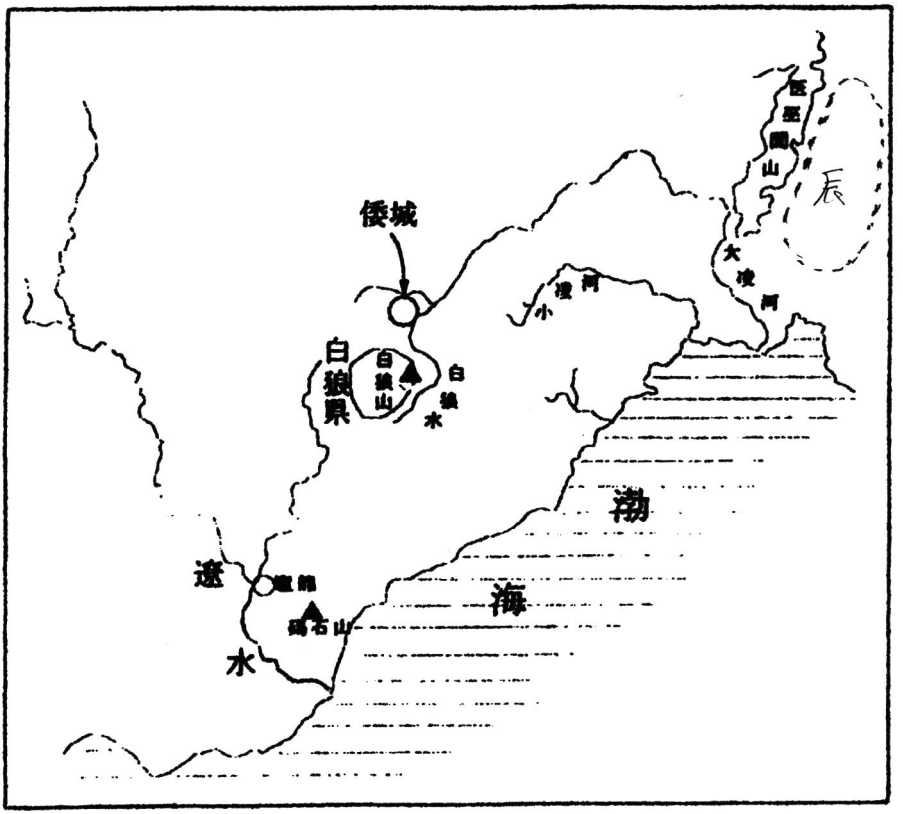


図４　医巫閭山と辰

第2章　「日本語」の起源

1　「日本語の起源」の研究

(1)　「日本語」は孤立言語

「日本語の起源」について、木田章義氏は（B本）の中で次のように述べている。

これまで日本語と関係があると言われた言語はたくさんあるが、その中で比較的まとまって論じられたものは、

朝鮮語、モンゴル語、南島語（マライ、ポリネシア諸語）、ツングース諸語（高句麗）、チベット語、アイヌ語、タミル語

しかし、今のところ、確実に日本語と兄弟関係にあると論証された言語はなく、逆に「音韻対応」を持った言語がないことから、日本語は孤立した言語であるという見解の方が強くなっている。

木田章義氏（B本）

(2)　ユーラシア大陸の語族と「日本語」

松本克己氏は（B本）の中で「ユーラシア語族」について次のように述べている。

日本語の系統または起源という問題は、今から百年以上も前から内外の大勢の学者が取り組んできて、未だに決着のつかない難問とされてきました。（中略）

現在、日本列島を含むこのユーラシア大陸には、数にして2、000ないし2、500以上の言語が話されていると見られていますが、これらの言語のほとんどは、同系関係によって10個余りの語族の中に纏められています。（中略）

日本語の場合、そのような基礎語彙のレベルで同系関係が確かめられるというような言語は、これまで全く見つかっていません。この意味で、従来の歴史・比較言語学の立場からは、日本語は外部に確実な同系言語を持たない、つまり系統的に孤立した言語として位置づけられてきたわけです。　松本克己氏（B本）

□「日本語」は「外部に同系言語を持たない孤立した言語」であるという。

□ただし、「日本語」「朝鮮語」「満州語」の祖語は「8つ」の「類型的特徴」を持つ言語であるという。（B本）

■それらは「Y染色体遺伝子」の「O2b」系統グループと一致する。

■「遺伝子」と「言語学」の一致である。（佃説）

2 「辰」のその後

(1) 医巫閭山の「辰」

「6000年前」頃に「朝鮮」と分かれて、中国東北地方（医巫閭山）付近に住む。（辰の誕生）

(2) 『契丹古伝』と「辰」

（注）『契丹古伝』は、中国の奉天（現瀋陽市）のラマ教寺院にあった古文書を日露戦争の時、濱名寛祐氏が写し取り持ち帰ったもの。題名は無かったので濱名氏が『契丹古伝』と名付けた。

『契丹古伝』は「辰」について次のように記す。

蓋辰者古国上代悠遠也。伝曰神祖之後、有辰沄謨率氏。本與東表阿斯牟須氏為一。辰沄謨率氏有子、伯之裔為日馬辰沄氏、叔之裔為干霊辰沄氏。干霊岐為干来、二千隔海而望干来。又分為高令云。然有今不可得攷焉。其最顕者為安冕辰沄氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。讓国於賁彌辰沄氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、擊退之。淮委氏、沃委氏竝列藩嶺東為辰守郭。潘耶又観兵亜府閭以掣漢。

『契丹古伝』

（訳）蓋し辰は古い国であり、上代より悠遠なり。伝えて曰く、神祖の後、辰沄謨率氏有り。本（もと）東表の阿斯牟須氏と同一なり。辰沄謨率氏に子有り。伯の後裔を日馬辰沄氏といい、叔の後裔を干霊辰沄氏という。干霊は岐（わか）れて干来となり、二千里海を隔てて而して干来を見ることができる。又分れて高令となるという。然るに今はそれを考えることができない。その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となる。潘耶は又亜府閭に兵を観せ、以て漢を掣（ひきと）む。

「辰」から種々の氏族が誕生している。

その中で「安冕辰沄氏」は「最も顕著なる者」とある。

「辰沄」とは「辰の流れ」という意味である。

「安冕辰沄氏」は「天孫降臨」する「倭人（天氏）」である（後述）。「日本人」を形成する中心の氏族である。

(3) 医巫閭山の「辰」のその後

『契丹古伝』の中に「（安冕辰沄氏は）国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて」とある。

大凌河下流域（医巫閭山の近く）に「倭人（天氏）＝安冕辰沄氏」が居た。「倭人（卑弥氏）＝賁彌辰沄氏」に「国を譲る」とある。それは「前２００年」頃である。

その直後に「漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となる。」とある。

「辰の守郭となる」とある。「医巫閭山」の「辰」は「前２００年」頃まで存続している。

(4) 辰韓・弁辰

『三国志』韓伝は次のように記す。

韓在帯方之南。東西以海為限。南與倭接。方可四千里。有三種。一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁韓。弁韓・辰韓者古之辰国也。　『三国志』

「弁韓・辰韓者古之辰国也」とある。『契丹古伝』の記述と一致する。

「弁韓」については、陳寿は「弁辰伝」にしている。

（注）「馬韓、辰韓、弁韓」の時代を「三韓時代」という。

○弁辰伝

弁辰亦十二国。（中略）弁辰彌離彌凍国・弁辰接塗国・（中略）弁辰狗邪国・（中略）・弁辰瀆盧国・（中略）。弁辰韓合二十四国。　『三国志』弁辰伝

陳寿は「弁韓」が「辰」であることを強調して「弁辰伝」にしているのであろう。

□「辰韓（新羅）」に「辰人」が居る。

始祖、姓朴氏、諱赫居世。（中略）至是、立為君焉。辰人謂瓠為朴。以初大卵如瓠、故以朴為姓。　『三国史記』新羅本紀

（訳）始祖の姓は朴氏、諱は赫居世。（中略）是に至り、立ちて君と為る。辰人は瓠（ひさご）を謂いて朴と為す。初め大卵（始祖は卵から生まれた）が瓠のようであったので、故に朴を姓と為す。

「新羅」の第一代王（朴赫居世）は「辰」の言葉を採用して姓を「朴」にしている。

第一代王（朴赫居世）の即位は「前57年」である。「辰人」はそれ以前から「辰韓」に居住していることがわかる。

「辰韓（新羅）」に「辰人」が居たことは『契丹古伝』『三国志』『三国史記』の「3つの史料」で一致している。

「辰韓」について『三国志』は次のように記す。

辰韓在馬韓之東。其耆老伝世、自言、古之亡人避秦役、来適韓国。馬韓割其東界地與之。

『三国志』辰韓伝

（訳）辰韓は馬韓の東に在る。其の耆老（きろう）が世々伝えて自ら言うには、古の亡人が秦の役を避けて来り、韓国に適（ゆ）く。馬韓は其の東界の地を割（さ）いて之に與（あた）える。

「辰韓」の人々は「秦の役を避けて来た」とある。「前220年」頃であろう。

「前221年」に、秦の始皇帝は中国を統一する。「万里の長城」や「幹線道路」の建設に人民を酷使する。多くの人々が逃亡する。

『三国史記』は次のように記す。

始祖、姓朴氏。諱赫居世。（中略）先是、朝鮮遺民、分居山谷之間為六村。（中略）是為辰韓六部。

『三国史記』新羅本記

（訳）始祖の姓は朴氏。諱（いみな）は赫居世。（中略）是より先、朝鮮の遺民は分れて山谷の間に居し、六村を為す。（中略）是が辰韓の六部と為る。

「辰韓」は「朝鮮の遺民」であるという。「6000年前」に分かれた「朝鮮人」であろう。「前220年」頃、朝鮮半島の北部から「辰韓」に来ている。

(5) 「辰」の言語

『三国志』辰韓伝に「辰韓」の言語が記録されている。

名楽浪人為阿残。東方人名我為阿。謂楽浪人本其残余人。今有名之為秦韓者。始有六国。稍分為十二国。

『三国志』辰韓伝

（訳）楽浪人を名付けて阿残と為す。東方人は我を名付けて阿と為す。楽浪人は本、其の残余人であると謂う。今之を名付けて秦韓者と為すもの有り。始め六国有り。稍分れて十二国と為る。

○「6000年前」に分かれた「朝鮮人」は後の「楽浪郡（朝鮮半島北部）」に住んでいることがわかる。

「東方人は我（自分のこと）を「阿」という」とある。

「日本」でも古代は自分のことを「阿」と言った。

さらに『三国志』辰韓伝に「辰韓」の言語が記録されて

いる。

馬韓割其東界地與之。（中略）其言語不與馬韓同。名国為邦、弓為弧、賊為寇。　『三国志』辰韓伝

（訳）馬韓は其の東界の地を割（さ）いて之に與（あた）える。（中略）其の言語は馬韓と同じからず。国を名付けて邦を為し、弓を弧と為し、賊を寇と為す。

「辰韓」では、「我＝阿」「国＝邦」「弓＝弧」「賊＝寇」「瓠＝朴」である。これらは「辰」の言葉である。「日本」も古代は「我＝阿」であり、現在も「国＝邦」である。

□「６０００年前」に朝鮮人は分かれているが、「辰」の言葉を使っている。

○「辰の言語」は「朝鮮」が分かれる前からすでに存在している。

□「日本語」は「辰の言語」である。

(6)　「日本語」の起源（まとめ）（佃説）

□「日本語」は「辰」の言語である。

■「辰の言語」は「６０００年前」頃に「朝鮮」が分かれる前から存在している。

■その後医巫閭山の麓に「辰」が誕生する。「前２００年」頃まで「辰」は存在していた。

■「前１０８年」に漢は衛氏朝鮮を討ち、四郡を設置する。

■「辰」の領土は漢の領土となり、「辰の言語」は滅びる。

■「６０００年前」に分かれた「朝鮮人」が朝鮮半島南部に逃げて来て、後の「弁辰国」「辰韓国」を形成する。「三韓時代」の「辰」である。人々は「辰」の言語を話す。

■「三国時代（４世紀以降）」になると、「三韓」は滅びる。「辰の言語」も滅びる。

■他の地域での「辰の言語」はすべて消滅する。「日本語」だけが残る。

■「日本語」は「外部に同系言語を持たない孤立した言語」になる。

□言語学者でもない「私」が「日本語の起源」を究明することができた。

■『契丹古伝』や『宮下文書』、および『三国志』『三国史記』を史実として理解していたからであろう。

第3章　「倭人（天氏）」

1　「前1200年」頃の「倭人」

(1)　『論衡』

「倭人」を記録した最古の史書は『論衡』であろう。

■周時、天下太平。越裳献白雉、倭人貢鬯草。
『論衡』「儒増篇」

（訳）周の時、天下は太平。越裳は白雉を献じ、倭人は鬯草を貢ぐ。

■成王之時、越裳献雉、倭人貢暢。『論衡』「恢国篇」

（訳）成王の時、越裳は雉を献じ、倭人は暢を貢ぐ。

「成王」は周王朝の二代目であり、在位は「前1115年～前1106年」である。

□「紀元前1200年」ころの「倭人（日本人）」は中国の呉地方に居る。

■この「倭人」が「3世紀」には日本列島（北部九州）に渡来している（天孫降臨）。

■「6000年前（紀元前4000年）」頃は「渤海沿岸（医巫閭山）」に居た。

■渤海沿岸からさらに南下して「前1200年」頃には呉地方に住み着いている。

2　「呉越の戦い」

(1)　「呉越の戦い」の終焉

「前473年」に「呉王夫差」（前495年～前473年）は越王句践に攻められ自殺し、呉は亡びる。「呉越の戦い」は終わる。

○南の越から攻撃を受けて呉の人々は北へ逃げる。

○「倭人」も北へ逃げる。

3　「倭人（天氏）」の移動(1)

(1)　箕子と武王

「前1122年」に殷は周の武王に滅ぼされる。「箕子」は殷王朝の宰相（総理大臣）である。

殷を倒した武王は「箕子」を訪問して教えを請う。

武王既克殷、訪問箕子。武王曰、於乎維天陰定下民

相和其居。我不知其常倫所序。箕子対曰、（後略）

『史記』宋微子世家

（訳）武王は既に殷に勝ち、箕子を訪問する。武王曰く、「ああ、天は陰で定めを維持している。下民は相和し其れに居す。我は其の常倫所序（常道の秩序）を知らない」と。箕子は対（こた）えて曰く、（略）

「箕子」は武王に「鴻範九等（こうはんきゅうとう）」を教える。

(2) 箕子を朝鮮に封じる

武王は尊敬する箕子を朝鮮に封じる。

於是、武王乃封箕子於朝鮮。而不臣也。

『史記』宋微子世家

（訳）ここに於いて、武王は箕子を朝鮮に封じる。而して臣とはしなかった。

これを「箕子朝鮮」という。

武王は「箕子を朝鮮に封じる。而して臣とはしなかった」とある。

「箕子」は武王の臣下ではないから「朝鮮」は周王朝の領域外にある。

(3) 箕子朝鮮の位置

「箕子朝鮮」の位置について『呂氏春秋』に注記がある。

非濱之東　朝鮮楽浪之縣、箕子所封。濱於東海也。

『呂氏春秋』巻二十

（訳）濱の東に非ず。朝鮮の楽浪縣は箕子が封じられた所である。東海に濱（ひん）するなり。

○「朝鮮」は中国大陸の東海に濱しているという。

「朝鮮」の位置について『史記』は次のように記す。

燕東有朝鮮・遼東、北有林胡・楼煩、西有雲中・九原。

『史記』蘇秦列伝

（訳）燕の東に朝鮮と遼東があり、北には林胡と楼煩があり、西には雲中と九原がある。

「朝鮮」は「燕」の東にあるという。「燕」は北京市の近くの「薊（けい）」にあった。すなわち「朝鮮」は北京市の東にある。北京の東にある海岸は「渤海」である。

□「箕子朝鮮」は「燕（北京市）」の東の「渤海沿岸」に在る。

図5　箕子朝鮮の位置

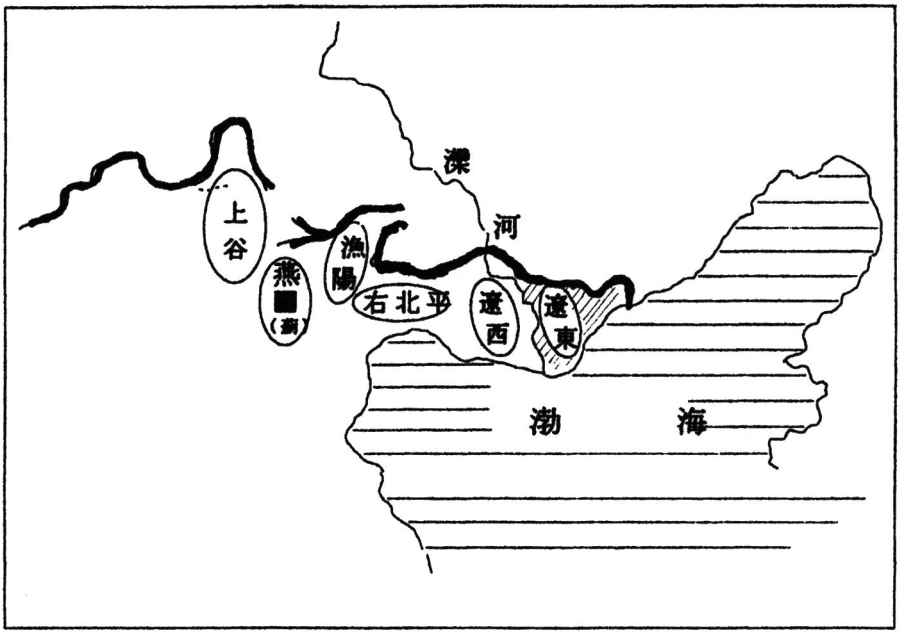


図５　箕子朝鮮

(4) 箕子朝鮮（殷）と混血

『契丹古伝』に「倭人（天氏）」は「殷（箕子朝鮮）」と混血したとある。

その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。『契丹古伝』

○「前300年」頃、「倭人（天氏）」は渤海沿岸に来て、「殷（箕子朝鮮）」から土地を分けてもらい、「箕子朝鮮」と混血する。

(5) 「倭人（天氏）」は大凌河下流域へ

「前284年」に「箕子朝鮮（殷）」は燕と戦い敗れる。「倭人（天氏）」も箕子朝鮮と共に大凌河下流域に逃げて住み着き、「国」を建国する。

(6) 国を「倭人（卑弥氏）」に譲る

「前206年」に「漢王朝」が樹立する。

「前195年」に燕の「衛満」は亡命して渤海沿岸に「衛氏朝鮮」を樹立する。

「漢王朝」は「衛氏朝鮮」にその先の東の領域の支配を任せる。

『契丹古伝』は次のように記す。

其最顕者為安冕辰沄氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。讓国於賁彌辰沄氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、撃退之。　『契丹古伝』

（訳）その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。

「漢王朝」が攻めて来る時期は「前206年」から「前195年」の間である。

中央値を取ってそれを「前200年」頃とする。

□「前200年」頃、大凌河下流域で「倭人（天氏）」は「国」を「倭人（卑弥氏）」に譲る。（佃説）

4 「倭人（天氏）」の移動(2)

(1) 高天原へ

（注）『宮下文書』は、山梨県富士吉田市の「宮下家」に保存されていた古文書を三輪義熙氏が整理して大正10年に『神皇紀』として出版したもの。私は『宮下文書』とする。

「前２００年」頃、「国」を「倭人（卑弥氏）」に譲った「倭人（天氏）」は「蓬莱山（高天原）」を目指す。

高皇産霊神の第五の御子（農立比古尊）は即ち「国常立尊」是なり。第七の御子（農佐比古尊）は即ち「国狭槌尊」是なり。（中略）高皇産霊神は、国常立尊、国狭槌尊に詔りたまはく、日の本なる海原に、状貌世に二なき蓬莱山のあるあり。汝が命等之に天降りて、蓬莱国を治せと事依し賜ひき。

乃ち先ず国常立尊は、其の依し賜へりし命の随に、一族眷属（けんぞく）数多の神々を率いて蓬莱山の煙を目標として天降りましき。然るに、一萬七千五百日を経るも復奏なかりしかば、父大御神、尊の安否を慮り、日夜宸襟（天子の気持ち）をぞ悩し給ひぬる。

則ち国狭槌尊に詔りたまはく、吾将に親ら国常立尊の後を追ひて天降る可しと。　『宮下文書』

「国狭槌尊」は父母を連れて朝鮮半島の全羅南道寶城郡の海岸（寶城湾）に上陸し、現在の国道2号線とほぼ同じ道を通り、東へ向かい、晋州市まで来る。そこから南へ国道3号線と同じ道を通り「高天原（泗川市）」に来ている。

図6　高天原の位置

その後「国常立尊」も「高天原」に来る。「高天原」の建国である。

□「高天原」の建国（佃説）

■「高天原」の建国は「前２００年」頃である。

■「高天原」は朝鮮半島南端の「泗川市」である。

■「国狭槌尊」による建国である。

■「国常立尊」は父母が死去した後に高天原にやって来る。

5　高天原の時代

(1)　高天原の系図（『宮下文書』）

図7　高天原の系図

伊弉諾尊（イザナギ尊）の系図

図8　伊弉諾尊の系図

(2)　「天照大神」の即位

『宮下文書』は次のように記す。

天照大御神は諱を初め大市毘女尊といひ、後大日留

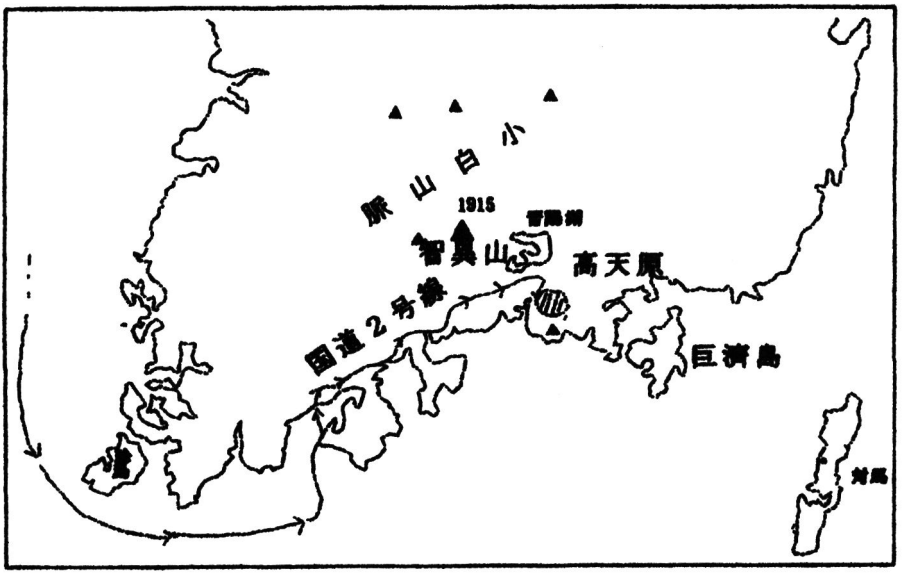


図6　高天原の位置

女尊という。伊弉諾・伊弉冉二柱の尊の皇女にましま す。二柱より、天つ日嗣の大御位を受けさせ給ひ、四方の惣大御洲を知食しめし給ふ。（中略）是に至りて、（中略）国を豊阿始原瑞穂国と名づけ給ひき。

『宮下文書』

□「天照大神」による「豊阿始原瑞穂国」の建国である。

■「天照大神」は「初代（一代目）」の王である。

弟の月峯命は次のように言う。

太市毘女尊（天照大神）は二柱（イザナギ、イザナミ）の初長子なり。故に尊を天つ日嗣となし、以て四方の惣大御洲を統させ給ふべし。　『宮下文書』

□二人の弟が居るにもかかわらず「長子」の女性が即位している。

（注記）現代よりも「男女平等」である。

(3)　国の儀礼・制度を定める

1）即位の儀式

「天照大神」はまず即位の儀式を定める。

高天原の系図

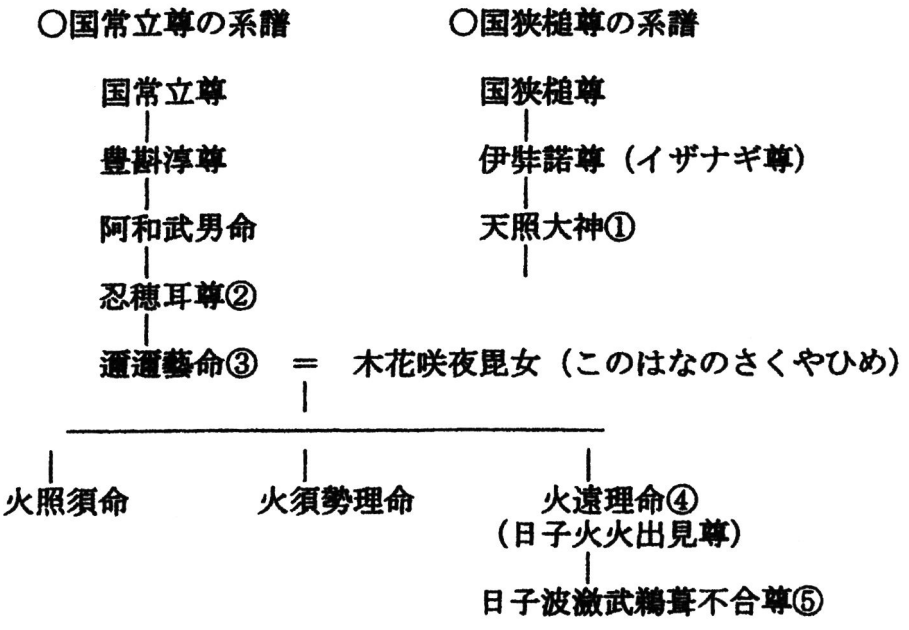
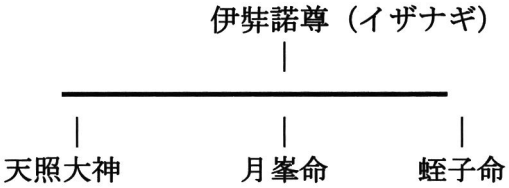


図７　高天原の系統

（注）番号は「豊阿始原世五代」（『宮下文書』より）



○天照大神には二人の弟が居る。

図８　伊弉諾尊の系図

大御位に卽くには阿祖山太神宮の神殿に於いて大御位に卽くことを定める。　『宮下文書』

2）「三種の神器」を定める

大御神（天照大神）は宝司の玉を神霊と名付け、御剣を室雲の剣と名付け、八角花形の鏡を内侍所の御鏡と名付け給う。この三品を大御宝と定めましき。　『宮下文書』

3）「皇族」を定める

大御神（天照大神）は、詔して、家系を定めさせ給う。即ち伊弉諾・伊弉冉の二柱の尊の子孫を皇族とし、若し天つ日嗣なきときは諸々の天つ神会議の上、皇族の内より選びて、大御位に卽かせまさむことに定め給う。　『宮下文書』

4）「国」「村」の制定

四方諸々の州々の大原・小原・大洞・小洞・大澤・小澤・大組・小組、並びに其の各頭を廃して、更に大国・小国・大村・小村を置き、国造・郷司・村長を置かせ給う。　『宮下文書』

5）国法・国政を定める

大御神（天照大神）は即位四万四千日のとき、左右大神初め八百萬の天つ神・国つ神を高天原の大御宮に会し、国法・国政を議り増します。　『宮下文書』

6）「典禮」を定める

代々天つ日嗣の大御位に即きまさむとする場合には太神宮の平殿に於いて三品の大御宝を拝し、之を捧げますを以て典禮と定めさせ給い、子孫代々堅く之を守るべきことを示し置かせ給う。　『宮下文書』

□天照大神は「豊阿始原瑞穂国」を建国する。

■国として必要な諸制度を制定する。

■天照大神は初代の王にふさわしい能力の持ち主である。

(4)　第二代　天の忍穂耳尊

二代目を「天の忍穂耳尊」とする。

天之忍穂耳尊は幼名を日吉毘古命といひ、諱を豊武毘古尊といふ。国常立尊の皇子豊斟渟尊の嫡孫にましまして、真心武命諱阿和武男命の御子にまします。

阿和武男命、子なきを憂ひ高天原の神祖神宗に祈りて、一子を生みませるや、暴かに神避りましぬ。天照大御神取つて以て御子となし、阿和武男命の義妹青木比女命をして養育ましまさしめ、日吉毘古命と名づけ給ひき。（中略）立てて天つ日嗣となし、諱を豊武毘古命と改め賜ふ。是に至って阿祖山太神宮なる宮守の宮に於いて、三品の大御宝を捧げて、大御位を受けましき。　『宮下文書』

天照大神は「伊弉諾・伊弉冉の二柱の尊の子孫を皇族とし、若し天つ日嗣なきときは諸々の天つ神会議の上、皇族の内より選びて、大御位に即かせまさむことに定め給う」としている。ところが二代目は「国常立尊」の子孫である。自分が定めた法に反している。

それは「天之忍穂耳尊」が生まれると父はすぐに死去して、天照大神が引き取り養育し、「養子」にしているからであろう。

(5)　『契丹古伝』と『宮下文書』

『宮下文書』は「天之忍穂耳尊」と記す。「天之」は「天（あめ）の」である。

『契丹古伝』は「安冕辰沄氏」と記す。「安冕」は「あめ」である。「安冕」＝「あめ」＝「天」である。「天之忍穂耳尊」は「安冕辰沄氏」であることが分かる。

高天原を建国した「国狭槌尊」「国常立尊」は「安冕辰沄氏」である。『契丹古伝』から『宮下文書』に歴史は続いていることが分かる。

□「倭人（天氏）」の歴史は『契丹古伝』から『宮下文書』に続いている。

■どちらも史実を記録しているから整合する。

■『契丹古伝』『宮下文書』を見ない限り「倭人（日本人）」の歴史は究明できない。

6　天孫降臨

(1)　外寇（邇邇藝命（ニニギノミコト）の時代）

第三代「邇邇藝命」の時代に次のような事件が起きる。

○「西北大陸」からの侵攻

一日（ある日）、西国より豊玉武毘古命馳せ来たり奏すらく、西北の大陸より、大軍附地見島に攻め来れりと。乃ち尊は高天原の大御宮に神后初め諸々の天つ神国つ神、八百萬神を神集に集へて、言向けまさむことを議り給いき。

（中略）乃ち武知男命を惣軍司令頭長となし、経津主命・武甕槌尊・玉柱屋命・御名方命の四軍神を軍大将となす。而して尊は神霊の御玉を玉体に副え、室雲の実剣を奉持し、神后は内持所の御鏡を玉体に副え、軍勢一萬八千神を率いて、作田毘古命を御前に立たして、遂に天降り給ひき。日夜重ねること五十三日にして西国に着きましぬ。　『宮下文書』

○ところが敵と戦うが大敗する。

第四代「日子火火出見尊」の時代に再び外寇がある。前回の「邇邇藝命の時」は多くの戦死者を出している。「日子火火出見尊」は「諸々の天つ神・国つ神八百萬神」を集めて議論する。その結果「神都を附地見島（筑紫）に遷す」ことを決める。

「神都」を「筑紫」に移すにあたり、「日子火火出見尊」は皇子「日子波瀲武鵜葺不合尊」に譲位する。

(2)　高天原から筑紫へ

五代目「日子波瀲武鵜葺不合尊」は「筑紫」へ征伐隊を派遣する。

今や、天つ神・国つ神・八百萬神の決議に基づき、将に神都を附地見島に遷さむとし給う。（中略）時に軍勢日に加わり、凡そ十萬餘神称す。

則ち、軍勢を二手に分ち、附地見島、東の水門より攻むる大将は、元帥火照須命、副帥武甕槌命・稚武王命、軍勢五萬餘神とし、他の一軍は、附地見島、南の水門より攻むる大将は、元帥火須勢理命、副帥経津（ふつ）主命・建御名方命、軍勢五萬餘神とす。（中略）

乃ち南軍は南水門より上陸し、賊の大軍と戦い、奮撃轉闘六百五十日にして、遂に賊軍を西北方面に撃壊し

ぬ。（中略）
是より旧都高天原を天都といい、新都を神都という。
『宮下文書』

(3) 「天孫降臨」は北部九州への侵略

「火照須命」と「火須勢理命」は各々「五萬餘の兵」を率いて「附地見島（筑紫）」を攻める。

○附地見島（筑紫）の征伐隊
■火照須命の東軍（五萬餘）…筑紫の東の水門＝「博多湾（筑前）」
■火須勢理命の南軍（五萬餘）…南の水門＝「有明海（肥前南部）」

□火照須命と火須勢理命の侵攻により、「筑前」～「肥前南部」を征伐する。
■これが「天孫降臨」である。
■「天孫降臨」は「高天原」から「北部九州」への「侵略」であり、「移住」である。

(4) 「日子波瀲武鵜葺不合尊」の移住

「附地見島（筑前～肥前南部）を征伐したので神皇「日子波瀲武鵜葺不合尊」が移住する。

乃ち神皇は、左右大神初め、天つ神・国つ神の諸役神を支り加えて、高天原より附地見島の新宮に天降りましまし給う。（中略）而して其の新に都を築きしに因り、附地見島を筑市（ちくし）島（後世、作筑紫）と改め給ひ、其御舟の初めて着きましし水門を津久始（つくし）初古崎（はこさき）とそ名つけける。
『宮下文書』

福岡市箱崎に上陸している。
（注）神皇「日子波瀲武鵜葺不合尊」は「火照須命」、「火須勢理命」の甥である。（図7）

(5) 「移住」の時期

○「天孫降臨」の年代（佃説）
■「天孫降臨」の時期は「前140年～前110年」頃であろう。

(6) 「天孫降臨」の地（佃説）

○火照須命が降臨したところは「福岡市西区」の「吉武高木遺跡」である。
○火須勢理命が降臨したところは「吉野ケ里遺跡」である。
○神皇「日子波瀲武鵜葺不合尊」が降臨したところは「福岡県春日市」の「須玖岡本遺跡」である。ここが「倭人（天氏）」の神都である。

7 「弥生時代中期」の始まり

(1) 「天孫降臨」による新しい文化

天孫降臨した「北部九州」「中部九州（筑後、肥後）」には新しい文化がもたらされる。

○「天孫降臨」による新しい文化

■青銅製品（銅剣・銅鉾、銅鏡等）

■甕棺墓

■水田稲作（灌漑用水、農工具等）

(2) 銅鏡の変化

銅鏡は女性の化粧用品であった。中国の女性の墓からは「小型の銅鏡」が一枚出土する。

ところが「天孫降臨」した「王の墓」からは大量の銅鏡が出土する。

『古事記』『日本書紀』では「瓊瓊杵尊」が天孫降臨する。『古事記』はこの時、天照大神は瓊瓊杵尊に次のように言う。

「此の鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝するが如くいつき奉れ」と言う。　『古事記』

「倭人（天氏）」にとって、「鏡」は「天照大神」の御魂ということになる。

これにより「伊都国の王」は「鏡」を「神宝」として、大量に集め、墓に埋納するようになる。

○伊都国王墓と鏡

■三雲南小路1号甕棺　35面

■井原鑓溝遺跡　21面以上

■平原遺跡　40面

□伊都国王は代々「天照大神」の言葉を受け継いでいる。それほど「天照大神」は偉大な女性である。

8 弥生時代後期初頭の「北部九州」

(1) 「伊都国」の樹立

吉武高木遺跡に天孫降臨した子孫が糸島市に移り、「伊都国」を樹立。

□「弥生時代中期後半」に「伊都国」が誕生する。（前50年～0年頃）

(2) **「紀元0年」頃、「倭国」（倭人（卑弥氏））の一部が渡来する。**

■博多湾沿岸に「倭奴国」を樹立して「神都」を滅ぼす。

■「57年」に「倭奴国」は後漢王朝に朝貢して金印を賜る。

(3) **「57年」直後頃、朝鮮半島南部の「不弥国」から一部が博多湾に渡来。**

■「倭奴国」を追い出して「不弥国」を樹立。

■「倭奴国」は筑紫野市へ逃げる。

■「倭奴国」は金印を志賀島に埋める。

(4) **「伊都国王権」の樹立**

○伊都国には「王」がいる。（図9）

「対海国・一大国・（末廬国）・奴国・不彌国」には「王」は居ない。副官は皆「卑奴母離（ひなもり）」で統一されている。

副官「卑奴母離」は「伊都国」が派遣しているのであろう。「伊都国王権」が支配下の国々を監視するために「卑奴母離」を派遣している。

□「70年～80年」頃には「伊都国」は「対海国・一大国・（末廬国）・奴国・不彌国」を支配して「伊都国王権」を樹立する。

図9　伊都国王権

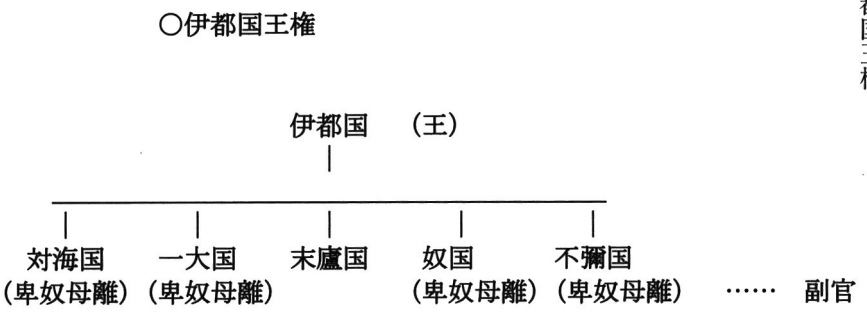


図9　伊都国王権

図10　大凌河上流の白狼水と倭城

第4章　「倭人（卑弥氏）」

1　「倭人（卑弥氏）」

(1)　黄河下流域の「倭」

「前473年」の「呉越の戦い」で呉は滅びる。「倭人（卑弥氏）」も「呉地方」から北へ逃げて、黄河下流域に「倭国」を建国する。

蓋国在鉅燕南倭北倭属燕　『山海経』海内北経

（訳）蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り。倭は燕に属す。

「鉅燕」とは「燕」のことである。戦国時代の燕は北京市の近くの「薊（けい）」にあった。

「倭（国）」を称するのは「倭人」の中でも「倭人（卑弥氏）」である。

(2)　大凌河上流の「倭城」（佃説）

「前300年」頃、「倭人（卑弥氏）」は黄河下流域から大凌河の上流へ移り、「倭城」を建国する。

2　「倭人（卑弥氏）」の移動

(1)　「前220年」頃、倭城から一部が大凌河を下る

その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。　『契丹古伝』

□「前220年」頃、「倭人（卑弥氏）」の一部は大凌河下流域に来て、「倭人（天氏）」から国を譲ってもらう。

(2)　「前50年」頃、朝鮮半島南部へ移り、「倭国」を建国（佃説）

韓在帯方之南。東西以海為限。南與倭接。方可四千里。　『三国志』韓伝

（訳）韓は帯方郡の南に在り、東西は海を以て限りと為す。南は倭と接す。方四千里ばかり。

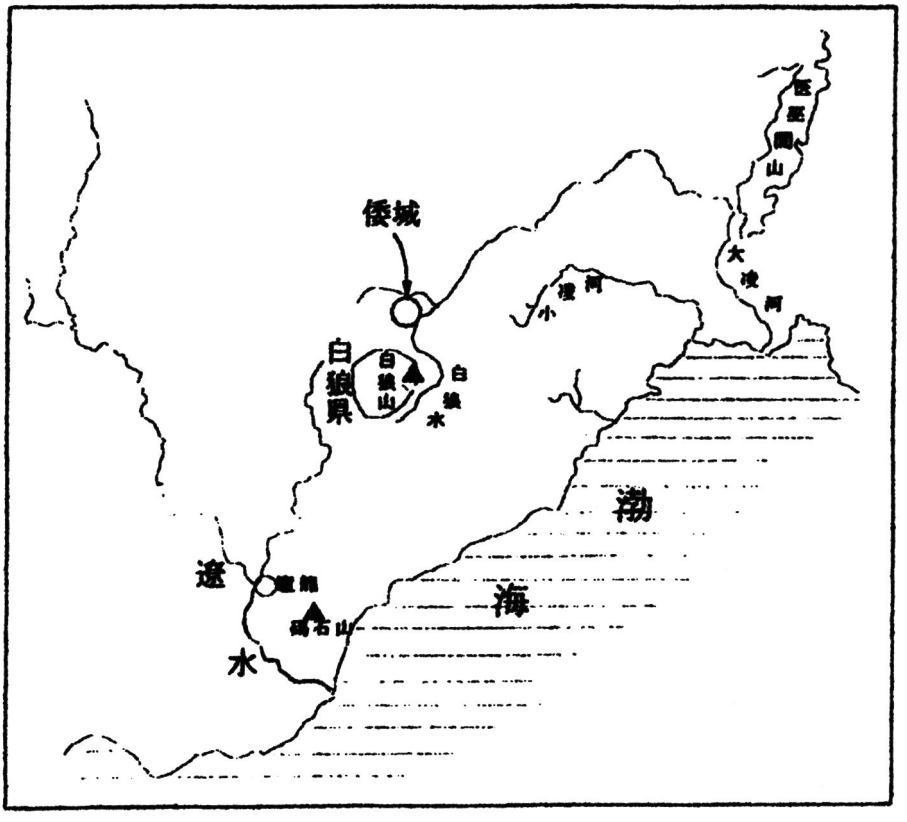


図10　大凌河上流の白狼水と倭城

□「前50年」頃、「倭人（卑弥氏）」の一部が朝鮮半島南部に「倭国」を建国する。

(3) 倭国王帥升の朝貢

「107年」に「倭国王帥升等」は後漢王朝へ朝貢する。

安帝永初元年、倭国王帥升等献生口百六十人、願請見。
『後漢書』倭伝

（訳）安帝の永初元年（107年）、倭国王帥升等は生口百六十人を献じて、請見を願う。

□「107年」に後漢王朝に朝貢した「倭国王帥升」は朝鮮半島南部の「倭国」の王である。

■「倭国」は「倭人（卑弥氏）」の国である。

■「倭国王帥升」は「倭人（卑弥氏）」である。（佃説）

第5章　卑弥呼

1　「160年～180年」頃の朝鮮半島

(1) 「桓帝、霊帝」の末の朝鮮半島

桓霊之末、韓濊彊盛、郡縣不能制。民多流入韓国。建安中、公孫康分屯有縣以南荒地為帯方郡。遣公孫模・張敞等、収集遺民、興兵伐韓濊。是後倭韓遂属帯方。
『三国志』韓伝

（訳）桓帝と霊帝の末に韓と濊は彊く盛んになり、楽浪郡やその縣は制することができなかった。民は多く韓国に流入する。建安中になると、公孫康は屯有縣を分けて南の荒地を以て帯方郡と為す。公孫模・張敞等を遣わし、遺民を収集して、兵を興し韓と濊を伐つ。是の後、倭と韓は遂いに帯方（郡）に属す。

□「桓帝と霊帝の末（160年頃、180年頃）」に「韓」と「濊」は朝鮮半島内を侵略する。

(2) 日本列島へ逃げる（佃説）

■「濊」に侵略された人々は朝鮮半島の東海岸を南下して日本列島に逃げてくる。これらの人々が山陰地

方から北陸地方に「四隅突出型墳丘墓」を造る。

■「韓」に侵略された人々は瀬戸内海に入り、岡山県に「楯築墳丘墓」を造る。

2 「古墳時代」の始まり

(1) 公孫氏と倭国

「建安中（204年～219年）」に公孫康は「帯方郡」を設置し、朝鮮半島内を荒らし回る韓と濊を伐つ。「倭」と「韓」は帯方郡に属したという。

□「建安中（204年～219年）」まで「倭国」は朝鮮半島南部にある。

（佃説）

(2) 古墳時代の始まり

「204年」以降に公孫康は「韓、倭、濊」を伐つ。朝鮮半島から大量の人々が日本列島に逃げて来る。人々は新しい文化を日本列島にもたらす。

□日本列島は「弥生時代」から「古墳時代」になる。

(3) 纒向遺跡の誕生（佃説）

朝鮮半島南部から逃げてきた人々の一部は大和に「纒向王権」を樹立する（76号、78号）。

□「纒向王権」の樹立は「204年」の直後ころであろう。

3 「倭国」と伊都国王朝の戦い

(1) 「220年～230年」頃、「倭国」は北部九州へ

公孫氏の支配は厳しかったのであろう。「220年～230年」頃、「倭国」は北部九州へ逃げる。

(2) 小郡市・筑紫野市に住み着く

筑紫野市には「倭奴国」があった。

「倭奴国」は追われて、朝倉市へ逃げる。

(3) 「倭国乱」と「相攻伐歴年」（佃説）

「倭国」は乱れる。

其国本亦以男子為王。住七八十年、倭国乱。相攻伐歴年、乃共立一女子為王。名曰卑弥呼。

『三国志』倭人伝

（訳）其の国は本（もと）亦男子を以て王と為す。とどまること七八十年、倭国乱れる。相攻伐歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名を卑弥呼という。

（注）「倭国乱。」で句点である。ここで文章は終わる。従来は「読点」にして「倭国乱れ、」と解釈している。

○正しい解釈

■「倭国乱」は「霊帝の末（180年）」頃の「朝鮮半島南部の倭国」である。

■「相攻伐歴年」の結果、「卑弥呼」は「北部九州」で「女王」になる。

「其の国は本（もと）亦男子を以て王と為す」は「107年」に後漢王朝へ朝貢した「倭国王帥升」である。それから「七八十年後に倭国乱れる。」である。丁度「霊帝の末（180年）」になる。

「相攻伐歴年」の結果、「卑弥呼」は「北部九州」で「女王」になり、「238年」に魏へ朝貢して「親魏倭王」になる。

(4) 「卑弥呼」は武将

「相攻伐歴年」の結果、「卑弥呼」は「女王」になる。

「長年」戦っているのに何故、男子が「王」になっていないのであろうか。

「卑弥呼」の方が男性達よりも戦いに貢献しているのであろう。

□「卑弥呼」は男性以上の戦いをしている。

■卑弥呼は先頭に立って戦っているのであろう。

■「卑弥呼」は武将である。

(5) 日本列島の「倭国」

「卑弥呼」は「親魏倭王」になる。「倭国の王（倭王）」である。

□日本列島に初めて「倭国」が誕生する。

■「後漢時代」の「倭国」は朝鮮半島にあった。その後「倭国」は朝鮮半島から「北部九州」に移ったと言える。

(6) 「卑弥呼」とは

「卑弥呼」は朝鮮半島の「卑弥国」の出自である。（倭国の中に卑弥国がある）

■「卑弥呼」とは「倭人（卑弥氏）」で、名を「呼」という。

■あるいは「卑弥国」の出自で、名を「呼」という。

□「220年～230年」頃に朝鮮半島南部の「倭国」は「北部九州」に移動する。

(7) 「伊都国王朝」と「倭国」の戦い（佃説）

「相攻伐歴年」は朝鮮半島から逃げてきた「倭国」と「伊都国王朝」の戦いである。

図11　伊都国王権と倭国

その結果「倭国」は「238年」に魏へ朝貢して「親魏倭王」になっている。「倭国」が勝利している。

(8) 「倭国」による支配

勝利した「卑弥呼」は「伊都国王権」に「一大率」を派遣する。

自女王国以北、特置一大率、検察諸国。諸国畏憚之。常治伊都国。於国中有如刺史。　『三国志』倭人伝

（訳）女王国より以北には特に一大率を置き諸国を検察す。諸国は之を畏憚す。常に伊都国に治す。国（中国）の中に於ける刺史のようである。

「女王国より以北の国々」とは「伊都国王権」の「対海国・一大国・末盧国・伊都国・奴国・不彌国」である。すなわち「女王国（邪馬壹国）」はこれらの国々の南にある。

□「邪馬壹国」は「筑紫野市・小郡市」にある。

「一大率」を派遣しているのは敗れた敵国（伊都国王権）が「反乱」を起こさないように監視するためであろう。

4　「倭国」と狗奴国の戦い

(1) 倭国の苦戦

「247年」に卑弥呼は魏へ狗奴国との戦いを報告している。

其八年、倭女王卑弥呼與狗奴国男王卑弥弓呼素不和。遣倭載斯烏越等、詣郡説相攻撃状。遣塞曹掾史張政等、因齎詔書黄幢、拝仮難升米、為檄告諭之。　『三国志』倭人伝

（訳）其八年（正始八年（247年））、倭の女王卑弥呼は狗奴国の男王卑弥弓呼と素より不和。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃の状を説明する。塞曹掾史の張政等を遣わして、因りて齎（持ってきた）詔書と黄幢を難升米に拝仮し、檄（木に書いたふみふだ）と為し、之を告諭す。

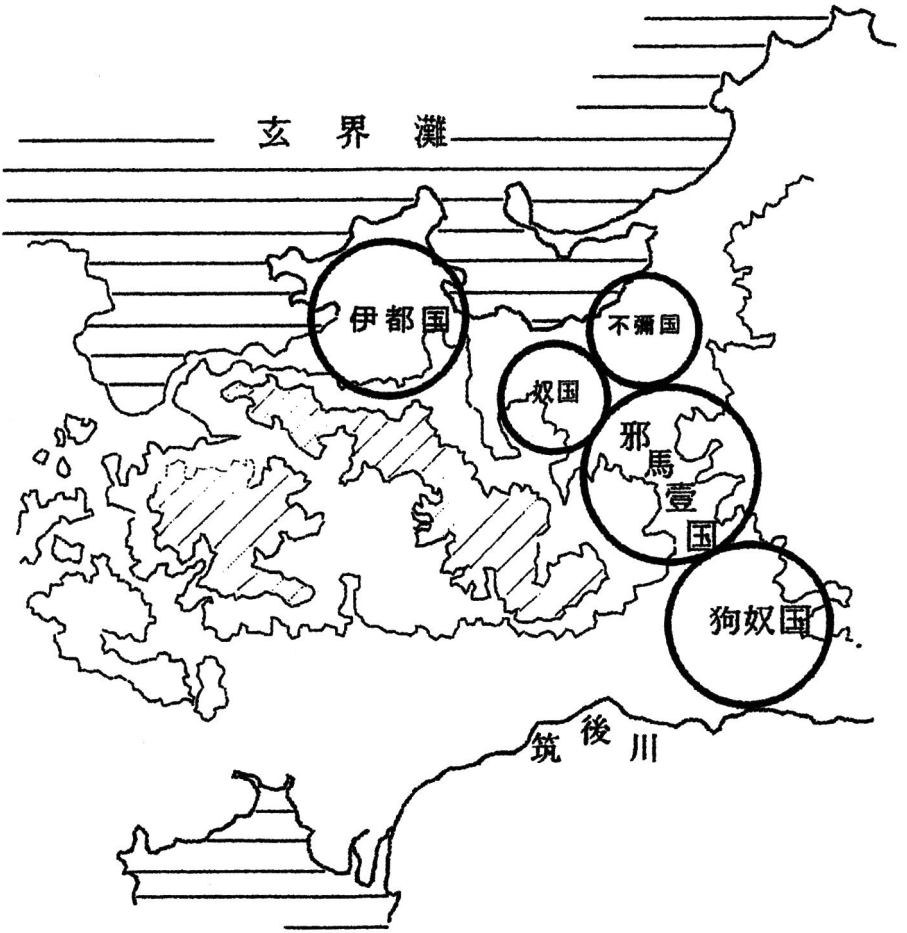


図11　伊都国王権と倭国（邪馬臺国）、狗奴国の位置

「狗奴国」とあるが「倭奴国」であろう。「狗奴国の男王卑弥弓呼と素より不和」とある。「卑弥弓呼」とは「卑弥氏」で名を「弓呼」というのであろう。「狗奴国」は「卑弥氏」であり、「倭奴国」である証拠である。

卑弥呼は戦う相手を同族とは思いたくなかったのであろう。そのために「倭奴国」を「狗奴国」として魏へ報告したのではないだろうか。

魏は卑弥呼の報告通りに「狗奴国」としている。『三国志』「倭人伝」はすべて「狗奴国」である。卑弥呼の戦略が功を奏したと言えるであろう。

□「倭奴国」は卑弥呼の朝貢により「狗奴国」と呼ばれるようになる。（佃説）

(2) 卑弥呼の戦死

魏は「張政」を倭国へ派遣する。「張政」は「247年」に来て、帰国するのは「266年」である。「張政」は「約20年間」も「倭国」に居て、「狗奴国」との戦いを支援している。

卑弥呼以死。大作冢。径百余歩。殉葬者奴婢百余人。

『三国志』倭人伝

「247年」に「狗奴国」との戦いを報告した直後に「以死」とあるから「卑弥呼」は「狗奴国」との戦いで戦死している。

□「247年」の魏への報告の後「卑弥呼」は「狗奴国」との戦いで戦死する。（佃説）

■「卑弥呼」は「王」になっても先頭に立って戦っている。

■「卑弥呼」はやはり武将である。

(3) その後の「倭国」

「卑弥呼」の死後、「倭国」は混乱する。

卑弥呼以死。大作冢。径百余歩。殉葬者奴婢百余人。更立男王、国中不服。更相誅殺。當時殺千余人。復立卑弥呼宗女壹與、年十三為王。国中遂定。

『三国志』倭人伝

（訳）卑弥呼は以て死す。大いに冢を作る。径百余歩。殉葬者は奴婢百余人。更に男王を立てるが、国中不服。更に相い誅殺す。時に當りて千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女壹與、年十三を立てて王と為す。国中遂に定まる。

卑弥呼の死後、「男性の王」が立つが、「国中不服」とあり、「更相誅殺。」とある。

「相誅殺」とは「お互いに相手が悪いとして殺害すること」である。ここでは「伊都国王権」と「倭国」の戦いであろう。伊都国王権は北部九州を支配していた。自分の方が「正当な王権」であるとして「卑弥呼が死去した」ので、復活をかけて再度戦いを挑んだのである。

ここでも「卑弥呼」は戦術にたけた武将であることがわかる。「卑弥呼」が生存しているときは「伊都国」は戦っていない。戦っても負けるとわかっているからであろう。卑弥呼が死去するとチャンス到来として再び戦っている。それほど「卑弥呼」は「戦術」に長けた武将だったのである。

「伊都国」は邪馬壹国と再度戦うが再び敗れる。「伊都国」は国を捨てて東へ逃げる。「神武東征(逃亡)」である。(佃説)

□「神武東征（逃亡）」の時期は「254年～265年」頃である（復元③、A本）。（佃説）

5 「倭国」の滅亡

(1) 「265年」に「魏」から「晋」へ

「266年」に「壹與」は「晋」へ朝貢する。その時「張政」は帰国する。

壹與遣倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人、送（張）政等還。因詣臺献上男女生口三十人。貢白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雑錦二十匹。　『三国志』倭人伝

（訳）壹與は倭の大夫率善中郎将掖邪狗等二十人を遣わし、（張）政等が還るのを送る。因りて臺（洛陽）に詣り、男女生口三十人を献上する。また白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雑錦二十匹を貢ぐ。

ここで『三国志』「倭人伝」は終わる。

その後は「倭国」も、「壹與」も中国の史書には出てこない。

(2) 「倭国」は廃墟

『契丹古伝』は次のように記す。

洲鮮記曰、乃云、訪于辰之墟、娜彼逸豫臺米與民率為末合。空山鵑叫、風江星冷。駕言覧乎。其東藩封焉。彼丘不知、是誰行。無弔人。秦城寂存。嘻辰沄氏殷、今将安在。茫茫萬古、詞綫之感、有座俟眞人之興而已矣。　『契丹古伝』

（訳）『洲鮮記』に曰く、乃ち云う、辰之墟を訪ねるに、娜（だ＝なまめかしく美しい）彼の逸豫・臺米は民と率いて末合となる。空山に鵑（ほととぎす）は叫

び、風や江（川）や星は冷（つめた）い。駕言覧乎。其東藩封焉。彼の丘は是れ誰が行くかを知らず。弔人無し。秦の城は寂しく存す。嘻（ああ）辰沄氏殷、今将に安（いづくに）か在る。茫茫（ぼうぼう）たる萬古、詞綫之感。座して眞人の興るを俟（ま）つ有る已（のみ）矣。

「辰之墟」とある。「卑弥氏」は「賁彌辰沄氏」である。「倭国の墟（廃墟）」であろう。「逸豫（いつよ）」は「壹與（いつよ）」であろう。「壹與（逸豫）と臺米」は「民と率いて末合となる」とある。「女王壹與」は国を捨てて逃げ出している。「倭国」の地は廃墟になっている。

□卑弥呼の「倭国」は滅びる。

第6章　神功皇后

1　多羅氏による「貴国」の建国

(1)　熊襲

「4世紀」になると北部九州には「熊襲」が居る。「熊襲」は「狗奴国」であろう。「狗奴（くな）」が「熊（隈）（くま）」になり、「熊襲」になったのであろう。

「狗奴国」は「倭国」との戦いに勝利して、「倭国」を追い出している。

□北部九州は「狗奴国（熊襲）」が支配するようになる。

(2)　仲哀天皇と熊襲の戦い

仲哀天皇（足仲彦天皇）は中国の東北地方から渡来して「橿日宮」に来る。ここで熊襲と戦い戦死する。

■（仲哀）八年正月、儺縣（なのあがた）に到る。因りて橿日宮に居す。
■九月、群臣に詔して熊襲を討つことを議（はか）る。
（中略）
■天皇、猶信じずに強引に熊襲を撃つ。勝たずに還る。
■九年二月、天皇、忽ち痛身有り。明日、崩ず。
一に云う、天皇、親（みずか）ら熊襲を伐ち、賊の矢に中り崩ずなり。
『日本書紀』

『古事記』に「仲哀天皇」の「崩年干支」がある。「壬戌年（362年）6月」である。この時期に「干支」を使って記録しているのは中国である。

「仲哀天皇」も中国からの「渡来人」である。

□「仲哀天皇」は「362年6月」に熊襲と戦い戦死する。
■『古事記』に「崩年干支」のある3番目の天皇である。

(3) 神功皇后の熊襲征伐（『日本書紀』）

「仲哀天皇（足仲彦天皇）」の後を継いだのが「神功皇后」である。「神功皇后」は『日本書紀』では「気長足姫尊」であり、『古事記』では「息長帯日売命」である。「足＝帯（たらし）」は「多羅の」である。「仲哀天皇」も「神功皇后」も「多羅氏」である。中国からの渡来人である。

神功皇后は「橿日宮（香椎宮）」を出発して、「御笠」「安（夜須）」を通り、「築後の山門」へ行き、そこから引き返して「（肥前の）松浦縣に到る」とある。これが神功皇后の「熊襲征伐」である。

図12　熊襲征伐ルート
（復元④、A本）

2 「貴国」の樹立

(1) 日本国民は「貴国」を知らない

国民は「貴国」を知らない。「歴史学者」が知らないからである。

しかし「貴国」は『日本書紀』にたびたび登場する。

ところが歴史学者は「貴国」を百済が「日本（倭王権）」を「貴い貴方の国」（二人称）としていると解釈している。

『日本書紀』に「貴国」は次のように出てくる。

（神功）四十六年三月、斯摩宿禰（しまのすくね）を卓淳国に遣わす。是に卓淳王末錦旱岐（まきむかんき）は斯摩宿禰に告げて曰く、「甲子年七月、百済人久氐・彌州流・莫古三人、我が国に到りて曰く、『百済王、東方に日本貴国有りと聞く。而して臣等を遣わし、その貴国に朝（もう）でしむ。故、道路を求めて斯土（この地）に至る。もし能（よ）く臣等に教えて、道路を通わしめば我が王は必ず深く君王を徳せむ』という。時に久氐等に謂いて曰く、『本（もと）より東に貴国有りと聞く。然るに未だ通うこと有らざればその道を知らず。ただ海遠く浪嶮し。則ち大船に乗り、わずかに通うを得るべし。（後略）』という。『日本書紀』

「366年」に神功皇后は斯摩宿禰（しまのすくね）を朝鮮半島の卓淳国に遣わす。卓淳国の王は「甲子年（364年）」に百済から使者が来て「東方に日本貴国があると聞く。そこへ行く道を教えてくれ」といわれた。しかし我々も未だ行ったことがないので道を知らないと答えたという。

「卓淳国」は朝鮮半島の南端にある国である。

「百済の使者」は「卓淳国の王」に「東方に日本の貴国」

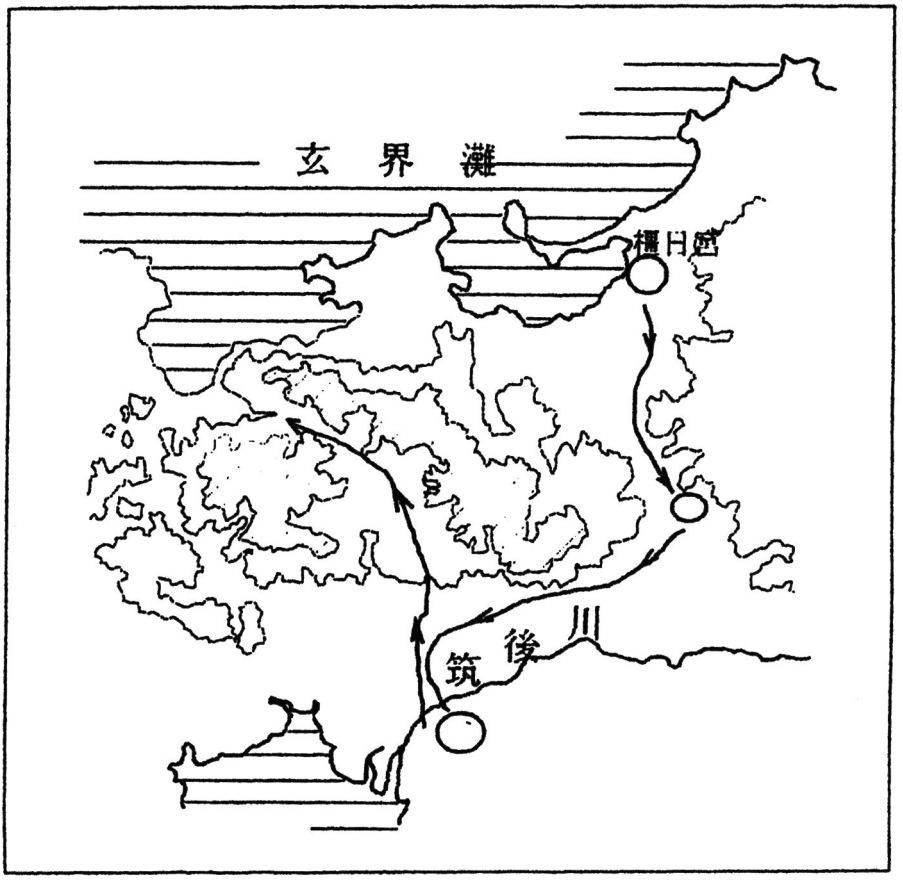


図12　熊襲征伐ルート

があると述べている。二人の会話の中に「貴国」が出てくる。「貴国」は三人称である。

□「３６４年」には「貴国」は存在している。

(2) 「貴国」の樹立（佃説）

「熊襲征伐ルート」の範囲が「貴国」の領域である。「貴国」は「筑前」と「肥前」である。

□「貴国」の樹立　３６４年
■貴国の範囲　筑前と肥前
■貴国の天皇の本拠地　肥前
（49号、55号、）

(3) 熊襲征伐と「神功皇后の父」

「神功皇后」の父は「気長宿禰王」である。

気長足姫尊（神功皇后）は稚日本根子彦大日日天皇（開化天皇）の曾孫、気長宿禰王の女なり。『日本書紀』

（注記）「気長宿禰王」は「開化天皇の曾孫」とある。「気長宿禰王」が渡来人であるから「万世一系」にするために架空の「開化天皇」と結びつけている。

「宿彌（すくね）」は貴国の称号である。

「気長宿禰王」は貴国の天皇から「筑前」を賜り、「宿禰王」になっているのであろう。それを受け継いだのが「神功皇后」である。

『古事記』には神功皇后の熊襲征伐は無い。おそらく「神功皇后の父」が熊襲征伐をしているからであろう。「熊襲征伐」で手柄を立てたので筑前の地を賜り、「王」になっているのであろう。神功皇后は熊襲征伐をしていない。（佃説）

(4) 貴国と宿禰

貴国は樹立して「30年後」には百済よりも強国になる。

（応神）三年（３９２年）、是歳、百済の辰斯王立ちて貴国の天皇に礼を失す。故、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を遣わし、其の礼なき状を嘖譲（せ）める。是により百済国は辰斯王を殺して謝す。紀角宿禰等は阿花王を立て王と為し帰る。『日本書紀』

「百済国は辰斯王を殺して謝す」とある。「３９２年」には「貴国」は百済国よりも強い大国になっている。

「貴国」には「天皇」が居り、その下に「宿禰」が居ることがわかる。

□「貴国」とは

■中国東北地方から「多羅氏」が渡来して「熊襲征伐」をして「貴国」を樹立する。

■貴国の樹立　364年

■貴国の領域　筑前と肥前

■貴国の天皇　本拠地は肥前

■筑前の王　気長宿禰王⇓神功皇后

(5) 神功皇后の逃亡（372年ころ）（佃説）

「神功皇后」は父の後を継ぎ「筑紫王」になる。ところが「372年」頃、武内宿彌に追い出されて奈良県奈良市佐紀町に来る。

「崇神王権」を伐ち、「奈良県北部」を支配する。

(6) 神功皇后の墓

（神功）六十九年（389年）十月、（神功皇后を）狭城（さき）盾列陵に葬す。是の日、皇太后を追い尊びて気長足姫尊という。　『日本書紀』

「狭城（さき）盾列陵」は奈良県奈良市佐紀町の「佐紀盾列古墳群」である。

「神功皇后」の墓は「五社神古墳」と云われている。丘の上にある「佐紀盾列古墳群」の中では最大の古墳である。

【参考文献】

A本　…　佃　收　著　早わかり「日本通史」（概要編）『新「日本の古代史」（佃説）』

B本　…　京都大学文学部研究科編『日本語の起源と古代日本語』（臨川書店、2015年

○佃　收　著

・古代史の提言①『新「日本の古代史」（上）』（次の号を収録）33号、36号、39号、45号、46号、47号、48号、49号、55号、56号、59号、60号、61号

・古代史の提言②『新「日本の古代史」（中）』（次の号を収録）53号、54号、62号、63号、64号、65号(2)、66号(2)

・古代史の提言③『新「日本の古代史」（下）』（次の号を収録）50号、57号、58号、59号、65号(1)、66号(1)、67号(2)、68号、69号(1)、69号(2)、70号(1)、70号(2)

○佃　收　著

・古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』
・古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』
・古代史の復元③『神武・崇神と初期ヤマト王権』
・古代史の復元④『四世紀の北部九州と近畿』
・古代史の復元⑤『倭の五王と磐井の乱』
・古代史の復元⑥『物部氏と蘇我氏と上宮王家』
・古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』
・古代史の復元⑧『天武天皇と大寺の移築』

（注）これらの著書は、出版者が廃業したため一般の書店では販売しておりません。「購入方法」等については次の「ホームページ」をご覧ください。

■　なお、「古代史の提言」シリーズ、「古代史の復元」シリーズは「ホームページ」で公開しています。

○ホームページ

・tsukudaosamu.com